

経営者のための法律相談Q&A その43

弁護士業は人工知能に奪われてしまうのか

1 弁護士は生き残れるか

人工知能の進歩は、目覚ましい。なんとといっても、将棋プロ棋士との対戦において、コンピュータ将棋ソフトウェアであるPONANZAが勝利したニュースには驚かされた。ディープラーニングとやらは、私たち人間の英知を超えた不気味ささえ感じられる。こうなると、遠くない将来、知的作業をこなす人工知能が普及し、私たちが行っている仕事は人工知能に奪われてしまうといった事態も現実味を帯びてくる。人工知能に奪われる可能性の高い職業として、弁護士助手や会計士も挙げられているようにあるが、弁護士業も、人工知能に奪われてしまうのであるか。

2 情報化の波は押し寄せている

ビジネスにおけるのと同じく、弁護士業においても、情報化の波は押し寄せている。同種事案の裁判例の調査は、専門書や文献からたどって、苦勞の末にたどり着いたときには達

成感をすこぶる味わえたものだが、

今や、膨大な裁判例がデータベース化され、クリックにより検索できるようになった。複雑化し、複合化する社会の中で、適切に事件を解決するためには、その事件の属する分野についての情報を入力し、分析しなければならぬが、情報が集積されているインターネットなくして効率的に行うことは難しくなった。このような情報処理業務は、しかしながら、人工知能の得意とするところであり、人工知能に奪われてしまうと思われる。

3 議論の力はどうか

弁護士として必要であり、最も大切な知的能力は、行為を法的に正当化する議論の力であると思っている。司法は国家権力の発動という絶大な力を有しているが、これは法理論によって正当化される。法律に基づかない、あるいは合理的でない論証によつては、国家権力の発動は許されないのである。

この行為を法的に正当化する議論の力をも、人工知能は修得してしまふのだろうか。もちろん、言語能力を修得するのはまだまだ先だとは思ふが、そもそも、コンピュータは論理に基づいて設計されており、法論理についても、人工知能の得意とする分野になるのではないだろうか。

4 生き残る道はあるか

こうしてみると、産業革命を経て、肉体的な労働が、エネルギーを源とする機械によつて置きかえられてきたように、大量の情報を分析し、合理化や効率化が求められる事務が、人工知能によつて置きかえられてしまふ日は遠くなく、弁護士業も例外ではなさそうである。人工知能は、行為を法的に正当化する議論の力をも獲得し、弁護士は、その僕となつて、証拠を収集したり、弁論したりすることになるのである。より深刻なのは、同じく勝負を生業とする仕事であっても、将棋プロ棋士は、人工知能を相手として負けたとしても、その魅力はいささかも損なわれるものではないが、弁護士が、人工知能相手に敗北を喫したときには、そう言うてはもらえないことである。

精進を重ねていくほか、生き残る道はなさそうであるが、人工知能が目覚ましい進歩を遂げている中、その行く末を見据えて精進を重ねていかないと、人工知能の僕に墮してしまふのではないだろうか。

(本稿担当) 福田 浩



弁護士法人あすか 東広島事務所
〒739-10015
東広島市西条栄町10番27号
栄町ビル5階
☎ 493-17100 ☎ 493-17101
弁護士 福田浩・今田健太郎・上相裕章・谷脇裕子・
中岡正薫・長谷川遠・坪井清隆